

## 昔も今も、、、震災の記憶を繋ぐ難しさ

2年前(2019年)の2月に本校立命館コースの3年生の生徒たちが、防災教育を学ぶために神戸市にある「人と未来防災センター」を訪れたことがあります。そこで阪神淡路大震災で起こった様子を3Dシアターで見てまわり、津波に足元が取られた際の重さを疑似体験することができました。訪れたときに強く印象的だったのは、語り部のボランティアとして震災の記憶を伝えている津久井幸子さんのお話でした。津久井さんは阪神淡路大震災(1995年)が発生したとき家の2階で寝ていたところ、大きな揺れで床が抜け落ち、瓦礫の中に生き埋めになってしまいました。頭を下に足を斜め上にした状態で動くことができず、助けを待っていたそうです。戦争中、神戸や明石で体験した防空壕での記憶と重ねて、平和で安心なところに避難することがいかに大事なのか、声を震わせて教えてくださいました。

いま東日本大震災(2011年)の発生からもうすぐ10年をむかえようとしています。震災の記憶が薄れないように語り継ぐ人たちは、私たちの命を守るため、失った家族との絆を持ち続けるため、つらい気持ちに打ち勝つために言葉を与えてくれます。東北の地方紙「河北新報」では「震災10年 あの日から」というコラムリレーを掲載しています。若い世代が語り継ぐ震災の記憶を記事の一部から紹介します。

### 「あの日から」第8部 遺児 赤間仁美さん 教壇から「備え」伝える(1/13掲載)

「東日本大震災を振り返るのは先生も苦しい。でも、みんなに伝えたい。命はかけがえないものだから」昨年12月中旬、横浜市金沢区の市立大道小学校。社会の授業で、4年2組担任の赤間仁美さん(25)が25人の児童に語り掛けた。赤間さんは宮城県名取市閑上地区の出身だ。高校1年の時に震災に遭った。自宅は全壊。母哉子さん(50)、近くに住む祖母八重子さん(79)、曾祖母くにゑさん(94)が津波で帰らぬ人となった。

大道小学校は海岸から約1.5キロ。近くに川が流れ、敷地は災害時の浸水想定区域に含まれる。南海トラフ巨大地震が予測される中、「被災地以外の子どもたちにこそ教訓を伝えたい」と思っている。この日の授業は登下校中や放課後、知らない土地など、学校外で地震に遭った際の行動がテーマだった。前の週にあった避難訓練を踏まえて話し合った。

「公園に行く」「高い所に逃げる」児童が次々に発言する。「情報を得る手段も大切。先生の地元では防災無線が鳴らなかった。いろんな想定を考えて行動しないと命は守れないよ」。赤間さんの言葉に力がこもる。震災を記憶している教え子はほとんどいない。聞きたいこと、自分が教えられることは何だろう。被災者の一人、教員として日々考え続ける。授業の下調べで関連資料を見返すのはつらい。それでも備えの重要性は伝えたい。子どもたちの未来のための努力は惜しまない。手探りで震災を伝え続ける赤間さんが、児童に話しているエピソードがある。あの日、哉子さんにあいさつしないまま家を出てしまった。今も悔やんでいる。「行ってきます」。そう言える毎日は、決して当たり前じゃない、と。



## 災害と防災について考える～高校2年生山本さん入賞～

第20回「高校生フォーラム・17歳からのメッセージ」（大阪経済大学主催）にて、数多くの応募作品の中から、本校高校2年生 山本 玲加さんが入選しました。自然の恵み豊かな日本に住む私たちの生活は、ここ数年、台風や大雨、大雪等の天災に見舞われ、防災意識の醸成と人々の協力が尚一層必要だと伝えてくれています。



### 日本の自然災害

高校2年 山本 玲加

日本は外国に比べ台風、大雨、大雪、洪水、土砂崩れ、地震、津波など自然災害が起こりやすい国です。このような自然災害は想像を超える勢いで時として、やってきます。だから日頃から防災対策をしておく事で被害を少なくすることが出来ると思います。

身近に出来ることはたくさんあります。一、自宅の耐震化、家中の家具などの安全対策をしておく。二、災害の警報や注意報などの情報を知っておき、ライフラインの停止状況を知る。三、家族で連絡方法、避難場所などを話し合っておく。四、防災グッズや備蓄品を家に置いておく。物流が途絶えた時のために一定期間は生きていける準備をして普段から自分に何が出来るかを考えておいて一人一人が出来る事に取り組むことが必要です。何かあってからではなく何もできない時にこそ災害に備えておくことが大事だと思います。

もし災害が起きた時は第一に自分自身の安全の確保を考えるべきだと思います。自分が生きているからこそ周りを心配したり助ける事が出来るからです。

日本は自然との距離が近い事から自然災害が多くあり、大変です。その反面、自然の恵みも多く受けています。色彩豊かな四季があり、豊富な水、海の幸、山の幸があり素晴らしい国です。自然は良い所も悪い所もあります。自然災害から身を守り自然と上手く向き合い、人々が協力し合い笑顔で豊かな気持ちで過ごせる国であってほしいと願います。

## 「いまをつたえたい」～阪神淡路大震災から26年～

神戸市中央区の東遊園地で毎年催される、「1・17のつどい」。震災から26年経った現在、神戸市民で震災を知らない世代が50%を超えた。被災経験を風化させないよう、学校への出張授業など活動してきた語り部のボランティアも年々高齢化して、震災の記憶の伝承が課題として突きつけられている。

★「阪神淡路大震災での動画や写真は何回も見たことがありましたが、実際に語り部の方が話している動画を今回見て、被災者それぞれに『復興』の捉え方があるということに、とても納得しました。——「復興」とは、震災が起こる以前の状況に戻る事なのか、以前と同じ状況とまではいかなくても、少しでも生活に「幸せ」を感じるようであればそうなのか、難しいことだな関心を持ちました。〈中学2年H・K〉

★母に大震災の話を聞いたところ、横揺れよりも、上下に縦に大きな揺れを感じたそうです。震災を体験していない若者に、実体験を持つ大人が話をし、次の世代に繋げていく活動が、何かの際に多くの人の命を守ることが出来るなと感じました。〈中学2年R・S〉

★震災を知らない世代が、自ら学び、それらをもっとさらに年若い世代に伝えていく重要性を知りました…震災について知識を得て、自分なりに考えたり、共有しあったりしたい。〈中学2年M・U〉

